

短 歌

アブラナの映る川面に子ガモ二羽寄り来る鯉に備えていたり
雨蛙十段飛びしてようように舗道渡りぬこの大日照り
電線に椋鳥数十ことごとく風上に向け頭並べる

犬山俊昭
(花舟短歌会)

愚かにも読むこと出来ぬ友の書に道を極めた風雅を感じず
木版に一色載せつつ和紙を摺る像の浮かびは白地の力
校歌には「誠を守る」佳詞がある我れを導く羅針盤なり

植田稔

川岸の桜舞ふたび川ごへの我が庭芝へ送り来る風
駅までの公園二つ満開のサクラサクラに電車見送る
百日紅風に削がるる枝や葉の花も幾年傷みにゐたり

大澤清水

小笹 岐美子

始球式終えてマウンド降りてくる背中に長いおさがが踊る
連日の熱帯夜に倦み見上げれば雲間にきりりと織月光る
辛き日にまじないのように歌いたる「時代」はすっかり私の十八番

加藤 和彦
(なぎさ短歌会)

涼風に穂先たわわや大庭の水田た豊作であれコンバイン行く
十五夜に栗の裾分けさあ茹でむ水に浮くこの一つを除き
連れ合いを亡くせし友と語るとき同情でなし励ましでなく

唐沢 小夜子

亡き父の愛した庭木が消えゆきて鳥の運びし種が芽吹けり
昼顔の絡まり咲ける路地裏に建設現場の音響きくる
公園そうじ途中で帰る吾れに寄す温かき声名も知らぬ人

木村 恵理

雨戸開けおはようさんと赤桃黄 元気色したぶつそうけ仏桑華の花
散歩道きんか金桂の香り誘導し初めての道道晩秋の風
三時起き着物姿で雨模様 京都に向い秋晴れの空

黒田 良子

酸欠に似たるおもいに日々過ごす空気のような君の居らねば
四季という言葉の感覚あいまいで春の夏日に秋の真夏日
涙かよひらに光る雨しづく紫陽花ほとりこほ零してもた擡ぐ

佐々木 波透

(渡内きらり四季の会)

シグナルを顎上げて走る女児をみなこに夏の風吹く背押すごとく
回診わすらに患ひのこと説き給ふわが医師の言すがしく聞きつ
倒伏たうふくの稲穂を前に農夫らはただうなだれる風の立つ午後

鮫 島 美和子
(なぎさ短歌会)

阿蘇の野に放たれ牛は駆け出せりぴよつこんどつとん春のステップ
湯浴みする人を待つ間にとろりとろり別府の浜の春の波音
時計草咲いて齢をまたひとつ重ねて仰ぐ水無月の空

塩 崎 麗 子
(湘南藤沢短歌会)

手折りきて部屋に活けたる黄水仙その明るさをひと日楽しむ
坂に立ち眺むる遠き山桜今年も我の春はととのふ
煮立ちたるチゲ鍋ひたすら食む夫の旨さの決め手は熱いことらし

須 田 とし子

過ぎし日の映像ばかり浮かびくる恋人の丘 龍恋の鐘
二階から見ゆる大木日を増して新緑濃くなり生命力満つ
セルフレジ昔は遠目に眺めおり今はスイスイ ドヤ顔となる

高 橋 美津子

デイケア八月皆勤施設長ほめ拍手くるるヒマワリ揺れて
右肩に腫瘤こぶし大MRIに縁のみ写りガンダリオンとか
伴奏者の孫紹介のアナウンスにその父の時の音蘇える

竹 中 亮 子

式典後振袖姿見て欲しと訪ひ来る孫のショー気取り愛し
落日を口に唾へて尾鰭撥ねくぢらぐも浮かぶ茜の空を
夕散歩の足のばしゆき紫木蓮風に膨らむ町に迷へり

田 村 孝 子

幸せは気づかぬままに通る過ぐ鉄橋渡る春風のように
生かされて生きる喜び探しつつ今を生きてるそれが幸せ
川端に木守り柿を見つけたり習わし残る冬の優しさ

膝痛め頼れる先に貼り薬超音波に励むりハビリ
響き合う吹奏樂に晴れ姿バントワラや藤沢まつり
地震禍に追い打ち掛けて水害や自然脅威と撓う心に

戸村忠子

雲間から折り折り洩るる月ひかり街の灯ともり虫の声する
断崖の地球岬は朝焼けて青き海原オレンジに染む
月日たちホームに慣れし我が妻はパパの顔よりおやつに笑顔

豊岡芳隆

永らえば永らうほどに故郷は臉の裏に「昭和」を映す
ふるさは昔噺の如くなり寂しき極み「限界集落」
老いてこそ想い出深む古里や生家今日より無人となりぬ

中川節子

つややかな柿の若葉のまばゆさよ五月の風に吹かれてゆるる
柿の葉は色さまざまに燃え尽きて晩秋の庭の面を彩る
夕闇のせまり来る中ツワブキの花は黄色の明かりを灯す

中田栄子
(花舟湘南短歌会)

お財布の軽さに驚く黄金山3日坊主でリバウンドオチ
食卓で「余りやすいの？野菜らしい」今はこんなに美味しいのね
お菓子箱夢がまつた玉手箱開けて悔しき一家団欒

濃霧
(藤沢翔陵高等学校)

葉もて虫を殺さば鳥鳴かぬ沈黙の春来るといふ本
老桜咲けば心に今生の苦も祝ぎ歌となりて響かう
自らの輪廻転生見るとき現世の外の蝶の羽化かも

早坂尚輝
(藤沢翔陵高等学校)

松 浦 みどり

(湘南藤沢短歌会)

「薄水」とふ菓子つくらむか紅梅の花のひとひら求肥に透かして
白藤の香のたをやかな春日なり蜜吸ふ蜂の羽音長閑けし
暮れやらぬ夏空にかかりてゐる月は透かし模様ガラスのうつは

森 睦子

桜散る砂場に遊ぶ幼子ら花びら集め春を遊びぬ
孫も子もわれの背をぬき遠のきて昔懐かしむ子どもの日なり
夕暮に東の空の満月にしばし佇み暑さ忘れし

山 本 澄 子

(九月会)

人も草も猛暑日続き萎えたる昼真すぐに立てる緑の黒松
島好きの夫と渡ってみたかった江の島までのトンボロの道
平凡なわたしだっけいいじゃないポテサラ美味しく作って食べよう